

出門みずよ

寺脇 研

渡邊寧久

※三人の書き手が交替でお送りします

昨今の落語界は、ホール落語

や独演会を中心に回っている。評判や情報もそちら中心な

らば、切符入手困難状況もその

方面で起きている現象だ。した

がって、そこに多く登場する落

語家に脚光が当たる。寄席出演

できない流派の人や寄席にほと

んど出られない二ツ目クラスに

目が向けられるのは、悪いこと

ではない。いやむしろ、多様な

落語家の存在に可能性を開くと

いう点では良い傾向とも言える

だろう。

ただ一方で、寄席が軽視され

るとなると、必ずしも喜んでほ

いられない。ホール落語や独演

会の盛況をよそに、寄席の入りはやや淋しい気がする。一時、「落語ブーム」に乗って繁盛した

ときに比べ、特に夜の部で空席が目立つ。その意味で、夜間割

引を拡大し2800円の料金を18時以降2200円、19時以降

1400円に設定した新宿末広亭の試みは注目されている。い

よいよ寄席興行側の改革が始まった。

だって、寄席の出演者のレベルは決して低くないのだから。そこへお客を呼び込むための工夫を、寄席側も出演者側ももっと考えてほしい。

ホール・独演会重視だと、逆に、

そちらにはあまり出ないが寄席にしよっちゅう登場する実力派が見落とされる。

たとえば小袁治。この人が出てくると場が締まる。『三年目』

『笠碁』『柳田格之進』などトリを取ったときの格調高さもいい

が、普通の出番のときの軽いネタが豊富な上、常に水準以上なのである。オーソドックスに演

じてみきちんと笑わせてくれるが、お使いの人を東北弁にした『金明竹』、中高年に向けて御三家といえは橋、舟木…とやる

『紀州』、そして『堪忍袋』では田中直紀前防衛相らしき人に「俺は辞めない！」と叫ばせる時事

ネタも挟まれるなど、この融通無碍ぶりがいかにも寄席らしい。

またたとえば笑遊。若い頃は演じる意欲が勝ちすぎている感があったこの人も年齢を重ねみ

ごとな味が出てきた。漫談風のおしゃべりが、実に楽しい。嘶

でも嫉妬がテーマの『格気の独楽』に愛嬌があったり、珍妙な『祇園祭』を披露してくれたりする。

自分自身が落語を愉しんでいる風情が、客席まで和ませる。そう、

寄席の客席は和やかでなければ。寄席に合った落語家は、まだ

まだたくさんいる。ぜひ、寄席に足を運んで彼らを発見していただけないだろうか。

てらわきけん★初プロデューサーを務める映画『戦争と一人の女』の撮影で松竹京都撮影所に滞在。江口のりこ、永瀬正敏、村上淳の役者陣の演技力に舌を巻く毎日です。